2018年6月13日 佐倉歴史同好会:於・臼井公民館 蕨由美

# 佐倉市とその周辺の女人講石造物









## はじめに

佐倉市や八千代市の旧村では、ムラ行事としての地域祭祀を支え、ムラ内の親睦をはかる様々な講中があり、ウブスナを祀る氏子中をはじめ、若者組(現代は祭礼の若衆や消防団)、出羽三山講、庚申講などが今でも続いています。

また、**女性の講**では、「**子安講**」(まれに「十九夜講」の名称のままのところもあり)や「**秩父講**」が「女人講」として続いている地区もあります。

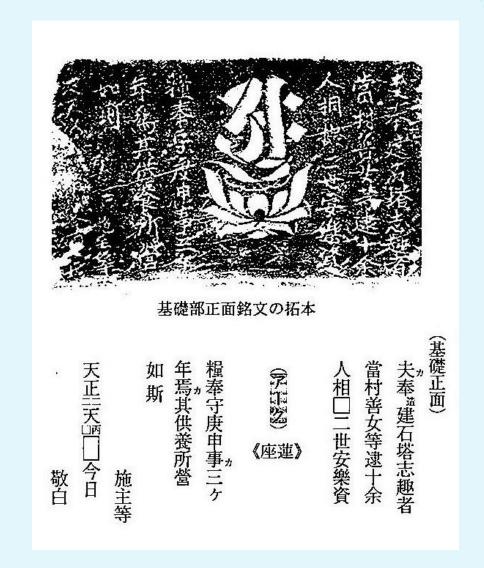
筆者も、講の集まりを拝見し、お年寄りに昔のことをお聞きする機会がありますが、それらの講、特に女人講の姿は、伝統を踏まえながらも時代に合わせて変遷しており、聞き取り調査でも、昭和初期以前のことは不明なことが多いのが現状です。

本来の「女人講の意味するもの」を探るには、近世文書があればよいのですが、それも乏しく、最も手近に参考になるのは、**石造物に込められたメッセージ**です。

石造物を追いながら、江戸初期に遡って、女人講とムラの女性の役割を考えていきます。

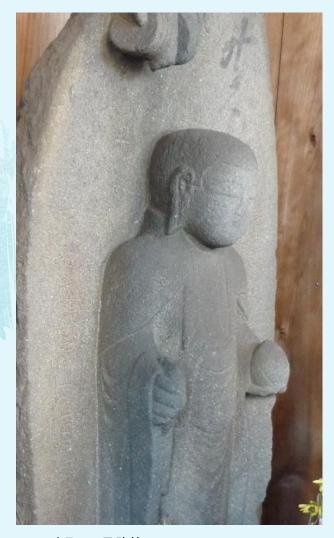
## 北総最古の女人銘石塔





天正4年(1576)銘の宝篋印塔(香取市貝塚の来迎寺個人墓地内)

## 船橋市海辺の石塔



本町2丁目路傍 「西向き地蔵」(延命地蔵像) 万治元年(1658) 「さんや村」の「念仏講中間拾弐人 同女人十六人」が造立



印内町 木戸内地蔵堂 伝·成瀬地蔵像 貞享4年(1684) 「念仏講連衆」女性19名 左前:寛延2年(1749)「奉造立如意輪観世音 十九夜 講中為二世安楽」

本町3丁目不動院 六面石幢 元禄十四巳年(1701) 「女念仏講為二世安楽」女性名39名







八千代市教育委員会

寛文10年(1670)八千代市米本の地蔵像 「女房衆念仏講同行二十三人」の銘

地

ては市

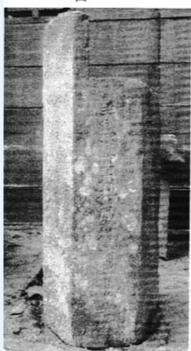
貞享三丙刀年八月十二日 奉安置六地藏塔廟二世安樂所 堂前女妨衆同道十三人 .五面) 石屋源太郎 (銘文なし) ヲカメ

ヲロス

ヲロツ

ヲカメ

ヲ



旧小見川町小見川の正福寺の元禄3年(1690)六 地蔵文字塔 「奉安置六地蔵塔廟二世安樂所

堂前女妨(房)衆同道十三人」と13人の女性名

「女念仏」から十九夜講へ多様な展開

の善福寺に立っていま

て刀の地

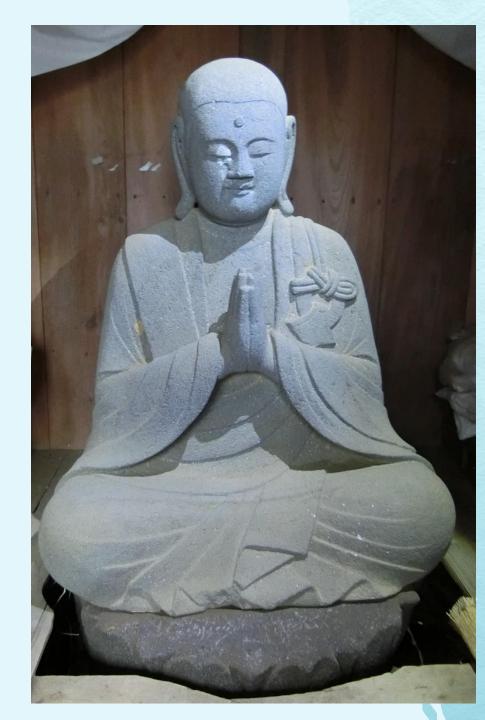
仰する習俗を示す

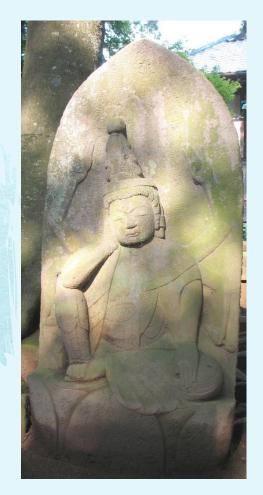
慶安3年(1650)建立の先崎地蔵尊 銘文「奉造立庚申人数廿五人/先崎村 本願友野河内/慶安三天/庚寅/二月廿四日」





女性たちが毎月24日に「オンカカ カミサンマエーソワカ」の真言を 300回唱えるための紙縒りと鉦、太鼓

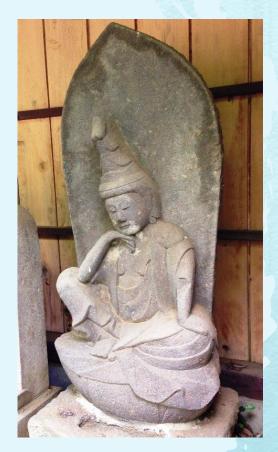




臼井台実蔵院 寛文9年(1669)



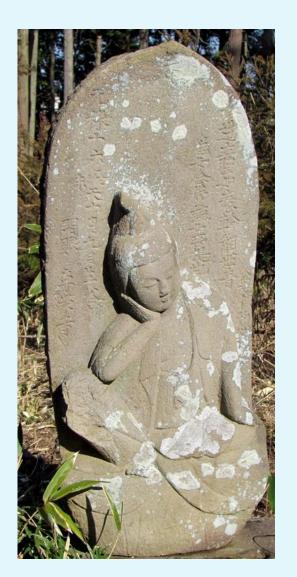
小竹西福寺の如意輪観音塔 延宝3年(1675)



下志津報恩寺念仏塔 貞享2年(1685)

土浮正福寺 元禄4年(1691) 「奉新造立**時念仏幷拾九夜**供養・・」 生谷梵天塚脇の念仏塔 元禄16年(1703) 「奉造立聖如意輪観世音/尊像惣(村)/ 為**女念仏講**菩提也・・開眼 専栄寺」







先崎 十九夜講の六地蔵 享保5年 (1720)

#### 十九夜塔の盛隆

## 十九夜塔の発祥地-筑波山ろくの石塔-1



つくば市平沢の八幡神社



つくば市平沢官衙跡(復元)



石造六角地蔵宝幢 (16世紀末)



「寛永九年(1632)三月十九日 願主敬白」と刻した石塔

雲母片岩に稚拙な彫りで 日月と蓮華座に座す仏像を 刻む

「十九日」の日付から、観音坐像を彫った十九夜供養 塔で筑波町最古とされている

## 十九夜塔の発祥地-筑波山ろくの石塔-2



つくば市北条新田の石塔群





「十九夜念仏供養」石塔

寛永10年(1633)の「奉造立石塔者十九夜念仏□□」銘石塔

#### 十九夜塔の盛隆

## 利根町の如意輪観音を主尊とした十九夜塔の初出





木像地蔵菩薩立像(子育で地蔵)



江戸時代地蔵市の様子(利根川図志:赤松宗旦著)



茨城県利根町布川の徳満寺 最古の如意輪観音像の十九夜塔 万治元年(1658)銘 4手の如意輪観音を線彫りした板碑型の塔 左は時(斎)念仏塔 元禄14年(1701)





## 十九夜塔の盛隆 千葉県内の十九夜塔の初出



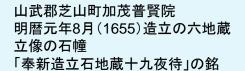
千葉県で一番古い十九夜塔は、香取市石納の結佐大明神境内の石塔中段に「キリーク」の梵字 台石に「承応元年(1652)壬辰年/十九夜侍之供養/十二月十九日」の銘













山武市本須賀の大正寺 万治2年(1659)宝篋印塔 「上総国山辺庄武射郡南郷本須賀村 奉唱満十九夜念佛二世安隠之所 萬治二年己亥三月十九日 結衆七十五人敬白」の銘

#### 十九夜塔の盛隆

### 十九夜塔とは

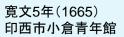
旧暦19日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、講を開き、如意輪観音の前で経文、真言や和讃を唱える行事を「十九夜講」と呼び、関東北東部で盛んに行われていたようです。

十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」で、主に、右手を右ほほに当て首をかしげ、右ひざを立て て座る姿の如意輪観音像が主尊として彫刻されています。



「十九夜念仏供養 二世安楽」などの 銘文と、如意輪観音浮彫像を刻んだ典 型的な十九夜塔が盛んに建てられるようになるのは、千葉県内では、寛文5年 (1665)印西市(小倉青年館)からです。

なお、千葉県内のその頃の像容は、二 臂より六臂の如意輪観音像が多く、また まれに聖観音像や地蔵像の十九夜塔も 見られます。



寛文10年(1670) 白井市延命寺



#### 十九夜塔の盛隆

## 十九夜塔の主尊は なぜ如意輪観音なのか



「熊野観心十界図」六道珍皇寺所蔵

血盆経(富山県立山博物館所蔵)



立山曼荼羅 吉祥坊本(血の池地獄)[個人所蔵]

「十九夜念仏和讃」=毎月十九日に集まって、十九夜念仏を唱えれば、血の池地獄に堕ちた女人を如意輪観音が救済してくださる

「血の池地獄」=「血盆経」という室町時代に中国で成立・伝来した 差別的な偽経に出てくる地獄

月経とお産で流す血の穢れから女性が逃れられない恐ろしい死 後の世界

「如意輪観音=血の池地獄の救済者」 何故血盆経信仰と結びついたのかは、中国における問題であり、 その理由は定かではない。

京都六角堂(『聖徳太子=如意輪観音』化身説)⇒「血の池観音 図」⇒16世紀後半の岡崎満性寺に伝来

熊野比丘尼の「観心十界図」(血の池・不産女地獄) 絵解き=血盆 経信仰を勧め、血盆経を頒布した

熊野は女性の不浄"を厭わぬ聖地

⇒熊野比丘尼により女性達がより積極的に血盆経信仰を受け入れる道を拓く

⇒宗派内を越え、如意輪観音が絵画を通して広く各地に定着

血盆経護符の携帯=不浄を他に及ぼさず、死後の成仏を約束⇒ 安産のお守り⇒関東では正泉寺が喧伝

高達奈緒美「血盆経信仰の諸相」から

## 十九夜塔の盛隆 十九夜塔の分布

#### 十九夜塔の分布

千葉県北部、茨城、栃木、埼玉、福島県の一部に多い

特に利根川流域を中心に、「古鬼怒湾」あるいは「香取の海」といわれる霞ヶ浦から印旛沼・手賀沼を含む湖沼から遡上する河川沿岸の村々ひろがる

#### 初期の十九夜塔造立数

利根川とその支流の小貝川・手賀川・長門川・利根常陸川の流入地点が 早い段階から十九夜塔普及の地域となっている

#### 十九夜塔の関東各県別の数

栃木県 2702基

茨城県 1672基

福島県 1449基

千葉県 1175基 \*

群馬県 142基

埼玉県 108基

中上敬一氏の2005年報告

\* 石田年子氏の2011年の集計で 千葉県 1997基

#### 初期の十九夜塔造立数

寛文10年(1670)まで

#### 茨城県側

利根町 10基

伊奈町 7基

取手市 6基

藤代町 3基

鹿嶋市 3基

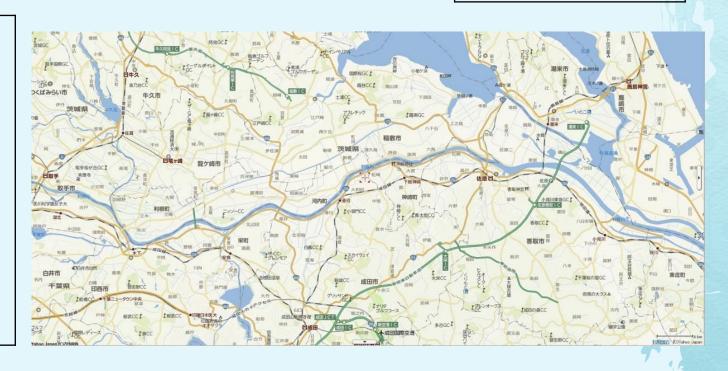
#### 千葉県側

印西市 12基

佐原市 6基

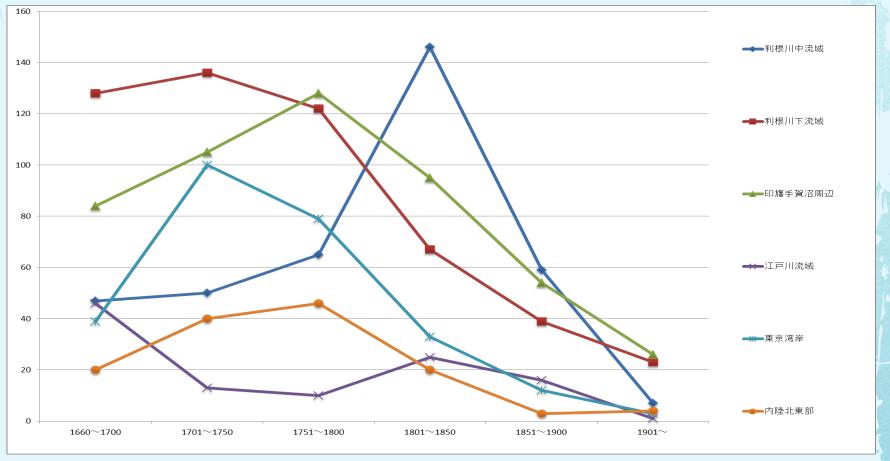
印旛村 6基

我孫子 5基

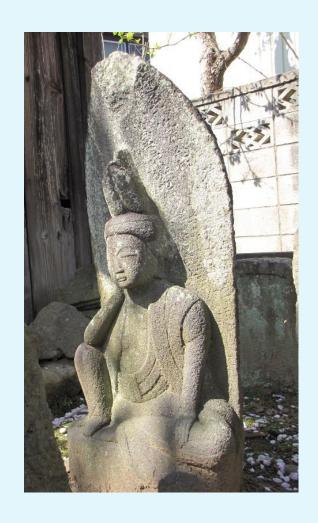


西暦	利根川中流域		印旛手賀沼周 辺	江戸川流域	東京湾岸	内陸北東部	計
1660~1700	47	128	84	46	39	20	364
1701~1750	50	136	105	13	100	40	444
1751~1800	65	122	128	10	79	46	450
1801 <b>~</b> 1850	146	67	95	25	33	20	386
1851 <b>~</b> 1900	59	39	54	16	12	3	183
1901~	7	23	26	1	3	4	64
不明	9	41	24	5	18	9	106
合計	383	556	516	116	284	142	1997

エリア				市町	「村名	- 1		
利根川中流域	野田	柏	我孫子					
利根川下流域	印西	栄町	成田	佐原	東庄	小見川		
印旛手賀沼周辺	沼南	鎌ヶ谷	白井	八千代	佐倉	酒々井	印旛	本埜
江戸川流域	市川	松戸	流山					
東京湾岸	船橋	習志野	千葉					<b>.</b>
内陸北東部	四街道	富里	大栄	山田	八日市場			



## 佐倉市内の十九夜塔-1



寛文12年(1672)臼井田常楽寺



享保14年(1729)青菅正福寺



宝暦10年(1760)先崎雲祥寺

## 佐倉市内の十九夜塔-2



安永6年(1777)臼井台実蔵院



文化5年(1808)生谷専栄寺



文化9年(1812)上座宝樹院

#### 子安塔とは

安産・子育て・子授けを祈願する女性の子安講が建てる**子安塔**は、「子安大明神」銘の子安石祠と、主尊が乳幼児を抱く像容を刻んだ子安像塔に大別される。

千葉県内で最古の子安塔は、元禄4年(1691)の袖ケ浦市百目 木子安神社の「子安大明神」銘子安像塔である。

北総では、元禄16年(1703)の八千代市上高野子安神社の「子安大明神」銘の子安石祠が古く、船橋市でも子安石祠が子安像塔にやや先行して現れる。

後者の子安像塔は江戸中期後半から普及し始め、「子安大明神」銘のほか、「十九夜講」や「子安観音」銘が見られるようになる。

佐倉市で子安像塔の初出は内田妙宣寺の宝暦6年(1756)の子を両手で抱く姿の子安像が浮き彫りされた石塔、ついで、大佐倉麻賀多神社の天明3年(1783)銘の「子安大明神」石祠で、二児を抱く像が石祠内に浮き彫りされている。

江戸後期には、さまざまな像容の子安像塔が建てられ、幕末から近代になると、十九夜塔に代って、印旛・東総地域の女人講石 造物のほとんどを占めるようになる。

東葛地域では、市川以西の江戸川流域での子安塔建立はほとんど見られず、船橋市古作町熊野神社の明治20年(1887)光背型子安像塔が最西端である。



安永5年(1776) 瀧水寺(旧本埜村)

## 千葉県最古の子安塔=袖ヶ浦市百目木の「子安大明神」 元禄4年(1691)銘







## 八千代市の子安神社 上高野と村上の「子安大明神」







元禄16年(1703) 上高野子安神社



延享2年(1745) 村上郷土博物館入口



宝暦9年(1759) 村上七百餘所神社古墳

明治30 年(1897) 上高野 子安神社

## 子安神石祠



元禄16年(1703) 八千代市上高野子安神社



宝暦8年(1758)上座熊野神社



宝暦9年(1759)井野八社大神







内田妙宣寺 宝暦6年(1756)

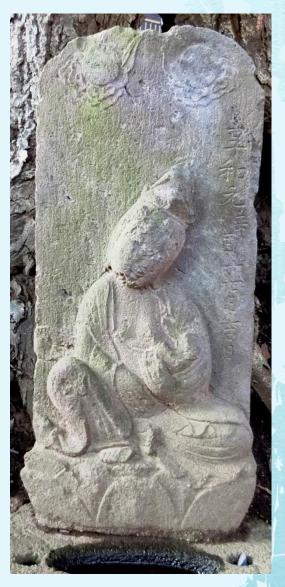
大佐倉 麻賀多神社 天明3年(1783)



井野千手院 寛政3年(1791)



飯野観音 寛政12年(1800)



大蛇町 神明神社 享和元年(1801)



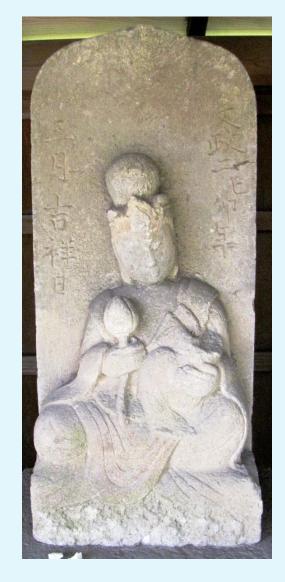
先崎雲祥寺 寛政3年(1791)



角来 八幡神社 文化8年(1811)



本佐倉妙見社 文化8年(1811)



山崎 竹内前弁天様 文政2年(1819)



大篠塚麻賀多神社 文政7年(1824)



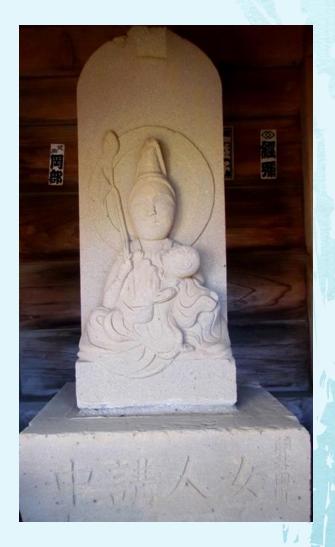
飯重大宮神社 嘉永4年(1851)



青菅正福寺 慶応3年(1867)



臼井台342付近 安政4年(1857)



臼井田星神社 大正3年(1914)

## **子安講の石造物** 北総の子安塔二近代から現代へ



明治33年(1900) 船橋市金堀町 竜蔵院

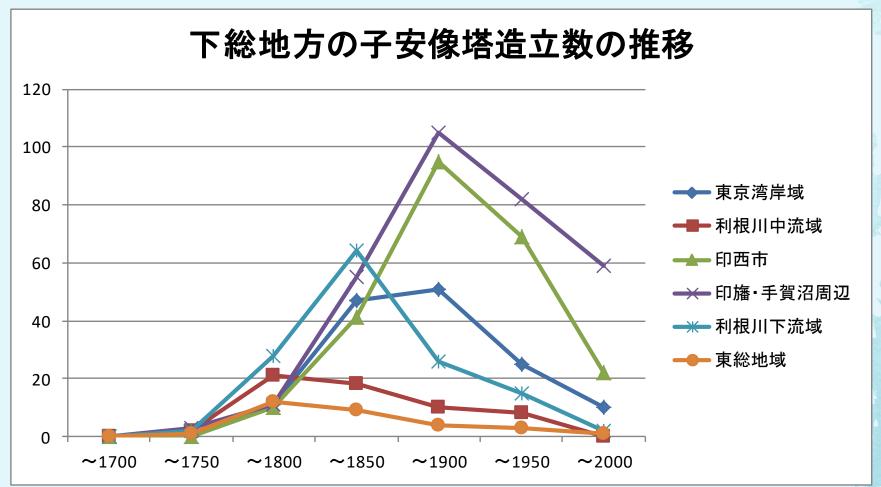


大正8年(1919) 白井市復 仏法寺



平成21 年(2009) 佐倉市生谷 専栄寺

図3 下総地方の子安像塔造立数の推移



## 子安講とは

子安講は安産・子育ての神である「子安様」を祀る若奥さんの講。

信仰的な集まりであるが、農繁期でもかならずお嫁さんを出席させることになっていて、昔からお嫁さんたちの息抜きの場であり、骨休めのレクリェーションでもあった。

八千代市下高野のように十九夜講の伝統を継ぐムラの子安講の場合は、「十九夜講」の名称のまま、毎月19日に開かれることが多いが、最近はその前後の週末に行われるようになり、場所も 本来の当番宅からムラの集会所や寺院で行っている。

戦後のベビーブーム期は、子供たちも多く、会場が母子であふれるほどであったという。

当番は朝、寺社境内の子安塔に香華を手向け、料理(最近は弁当か茶菓子のみ)を準備し、本尊の子安像の掛け軸を掛けて、灯明を供える。この灯明の燃えさしは、お産が軽く済むようと妊婦が持ち帰る。

毎月の儀礼は子安講の「ハナミ」(「ハツセ」) 唄の唱和と直会であるが、 新春の「子安びしゃ」では、当番の交代の儀礼をおこなう。

#### 現在の女人講の姿 八千代市内の子安講

## 高津新田の子安講と 諏訪神社の子安様



毎月15日か近い週末、高津新田西集会所で行われる。「子安様」と「ごちそうさま」の「ハツセ」を歌う。







弘化5年(1848)子安観音

## 現在の女人講の姿 八千代市内の子安講

## 高津の子安講





19日に高津山観音寺で行う。 「水子地蔵」(昭和59年建立)に参拝。

料理のメインは鶏飯。





## 高津の子安講-2



一めてたやな これのおざしきところよろこぶ はばをとるところよろこぶ はばをとるといとのもちいの あるようにひとのもちいの あるようにひとのもちいの あるようにひとっまいるか かみをきよめ かみを清めてみをきよめ かみを清めてみをきよめ かみを清めてするができるとは おざえと ひろめするあとは おざえと ひろめする



食事の後、一同本堂内陣前に集まって「子安講のハナミを唄う。

#### 高津の子安講-3 高津観音寺に並ぶ十九夜塔と子安塔





高津の子安講では、講の会費から積み立てをして、連続して「イシダテ」をする慣習があります。

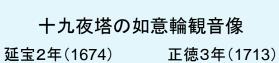
延宝2年(1674)~明治6年(1873)の7基は、如意輪観音像明治19年(1886)~昭和25年(1950)の6基は子安観音像昭和57年(1982)は、聖観音像

最新の子安塔は、平成26年(2014)造立

## 高津の子安講-4 高津観音寺に並ぶ十九夜塔と子安塔









子安観音像 昭和2年(1927)

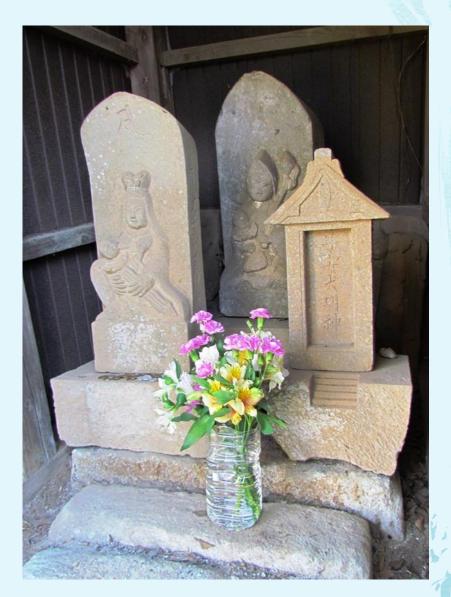
## 現在の女人講の姿 八千代市内の子安講 麦丸の「子安ビシャ」



2016年3月17日 東福院境内の「やすらぎの家」にて



子安講の本尊「子安大明神」の掛け軸 文化15年(1818)奉納



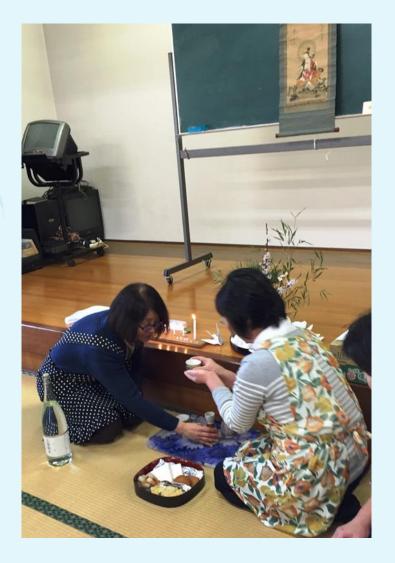
当番が花を手向けた東福寺境内の子安さまの祠には、文化7年 (1810)「子安大明神」銘の石祠をはじめ、大正・明治の子安像塔が 祀られている。



盛り米に桜の枝と鶴亀を飾った蓬莱 灯明(燃えさしは、お産の近い方へ) 七つの具の入った「神様へのごちそう」







新旧当番が盃を交わす「おとうわたし」





はアばアをオオとオる

えェりィーて

はアなアーばアアーなーとオオオまアアーえエ

たからアおオさアアずりけ」



#### 現在の女人講の姿 消えゆく子安講

#### 大和田円光院の女人講石造物





宝永5年(1708)の十九夜塔



昭和4年(1929)と、文久元年(1861)の子安塔

#### 現在の女人講の姿 消えゆく子安講

#### 大和田円光院の女人講石造物-2





昭和32年建立の子安塔は平石型で、子安像の陰刻と51名の名前があります。

これ以降、大和田の子安講は秩父講に 変っていき、昭和36年~平成14年まで6 基の参拝碑が建てられています。

江戸期・十九夜講⇒近代・子安講⇒現代・秩父講と変わっていくムラの女人講の変遷を、ここ円光院の石造物で見ることができ、またこの女人講の変遷は、成田街道沿いに八千代から佐倉にかけての傾向でもあります。

## 男女が対等であった石塔建立

ムラの講による石塔造立が行われるのは、ムラの生活が安定した江戸前期の万治のころ(1658~)からであるが、そのころから中期前葉の元文のころ(1740)までの石塔には、結衆した多くのムラ人の名前が列記されていて、念仏講や女人講関連の石造物では、「おとら・おくら」などの女性名の列記も多い。

また、男・女別の講が同年同日にペアで石塔を建てることもこの時期の特徴である。

八千代市吉橋の尾崎では、寛文8年(1668)十月十日、台座に「なつ・まつ」など16人の女性名のみ連記した日記念仏塔を建立しているが、この同年同日には、男性名18人列記の勢至菩薩像を刻んだ二十三夜塔も建立されている。

元禄5年(1692)、同じく吉橋の寺台でも、男性は二十三夜塔、「おとら・おたけ」などの30人の女性は聖観音像の日記念仏塔を造立している。男・女それぞれ別の講を構成しつつも、信心業の証しとして造塔の事業を同時に営んでいることは、当時のムラ内の女性の地位を表しているといえよう。

また、八千代市萱田では、寛文9年(1669)の「二十三夜講」と「日記念佛」の趣旨の銘を、三層塔の塔身に面を替えて刻み、それぞれ男女別に名前を記している。その「おつる・おこう」など24人の女性名列記の前には「一結施主 女中衆」とあり、女人講の成立がうかがわれる。

このように、一つの石塔の別面に、男女別に名前を列記する例は、同市萱田の延宝元年 (1673)の庚申塔でも見られ、この笠付角柱型塔の右面に「およし・おきく」など女性33人、左面には男性15人、正面に僧など3人の名が刻まれている。萱田では、いずれも男・女それぞれの講が共同して、これらの供養塔を建立したのであろう。



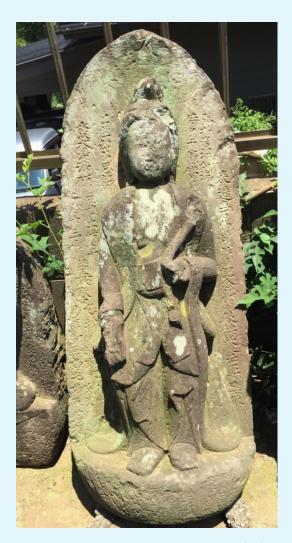
八千代市吉橋尾崎大師堂境内の二十三夜塔 寛文8年10月10日 「右勢至菩薩者廿三夜待開眼成就所 吉橋村施主敬白」銘



尾崎大師堂境内の女性主体の日記念仏塔 寛文8年10月10日 「右地蔵菩薩者日記念仏供養成就処 吉橋村施主敬白」銘



寺台公民館(勢至堂跡)の二十三夜塔(勢至菩薩像) 元禄5年(1692)2月23日 「二十三夜開眼供養」男性名22人銘



寺台公民館の日記念仏塔(聖観音像) 元禄5年(1692)2月23日「日記念仏開眼供養」 女性名30人銘。両者の願文と経文の形式はほぼ同じ。







八千代市麦丸台庚申塚の青面金剛像庚申塔 「奉造立青面金剛尊像一軀講中/二世安楽/下総国千 葉郡麦丸村/元文五庚申年(1740)十一月十七日」銘

麦丸東福院の如意輪観音像十九夜塔 「奉造立聖如意輪観世音菩薩/一軀講中二世安樂/元文五庚申天 (1740)十一月十九日/十九夜講中同行三十五人」銘

#### 石塔にみる近世のムラの女性たち 男女が対等であった石塔建立

萱田の長福寺の日記念仏・二十三夜供養三層塔



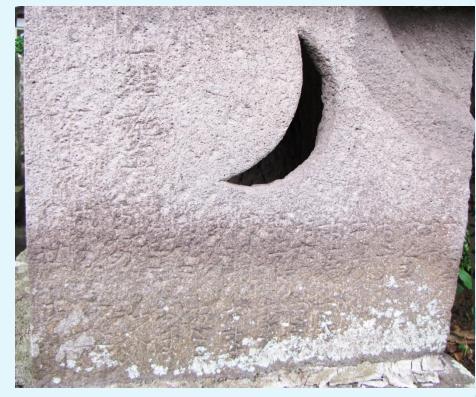
左奥:宝暦13年(1763)十九夜宝篋印塔

中央: 寛文9年(1669)日記念仏•二十三夜供養三層塔

左前:嘉永5年(1852)子安観音塔 右:元禄2年(1689)如意輪像十九夜塔



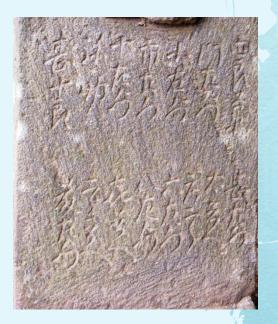




# 石塔にみる近世のムラの女性たち 萱田の延宝元年(1673)の庚申塔







#### 石塔にみる近世のムラの女性たち 平等に供養された女性のお墓

八千代市麦丸には、江戸時代を通じて営まれ、墓地整理などの改変を受けていないマイリ墓がまだ残っており、2016年に八千代市郷土歴史研究会の有志と、**麦丸のセイマイマエ墓地**の墓塔全数の年銘、戒名の位号、形態、像容にわたって調査を行った。

その塔数は173基、被供養者の人数は総計200名で、年銘による時代区分と位号、それによる男性・女性・児童の別について分析を行った。

その結果、麦丸での墓塔の造立は、寛文・延宝期から造立が盛んになり、1700年代(元禄13年~宝永~正徳~享保5年)が最も多く、1760年~1780年代(宝暦10年~明和~安永~天明~寛政)に数に陰りが見え始める。

1800年代(文化・文政)に回復するように見えるが、そのころは童子・童女という子供の位号が増えて、その分さらに大人の信士・信女銘の墓塔数は減っていくことになる。

江戸後期に童子・童女の位号が増えるのは、幼少時の死亡が増えたわけでなく、人口停滞期で少子化が進み、それだけ子供が大切にされ、子供の死を悼んで手厚く供養するようになったからであろう。

大人の位号は、ほとんどが信士・信女で幕末までかわらず、近現代に多く見られる居士 や大姉はない。

**例外的に2例ほど院号がつく信女の墓塔**があるが、それ以外にムラの人々の間の階層 化は見られず、極めて平等である。

また信士や禅定門の男性位号より、信女・禅定尼の女性位号がやや多く、男女間の差がないのはもちろん、如意輪観音像塔の多さや院号がつくなど、女性に対する供養のほうが丁寧であった。

# 石塔にみる近世のムラの女性たち 平等に供養された女性のお墓 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査





# 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査







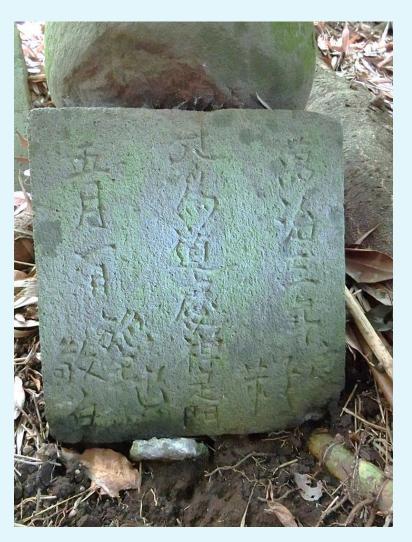
左:万治3年銘 右:宝永7年銘

# 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査-3



## 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査

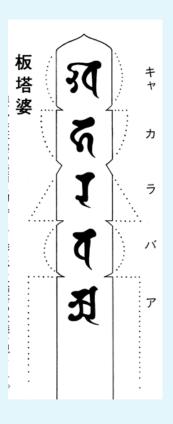




五輪塔(1660年銘) 「萬治三年庚子/(梵字)爲道慶禅定門/菩提(異体字)也/五月一日/施主/敬白」

## 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査

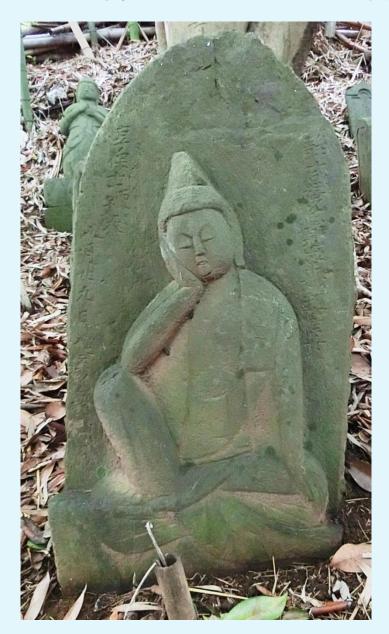




板碑型(1670年銘)

銘「寛文十天/妙真禅定尼/ 菩提(異体字)/也/九月八日」

## 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査-6



如意輪観音像塔(舟型光背型 1726年銘) 「静感院覺峯妙契信女 /享和十一丙午天/八月廿九日 施主(弥〇〇)」

#### 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査





「真言」とは「マントラ」の訳語で、密教における「仏の教えや功徳などを秘めている呪文」である。

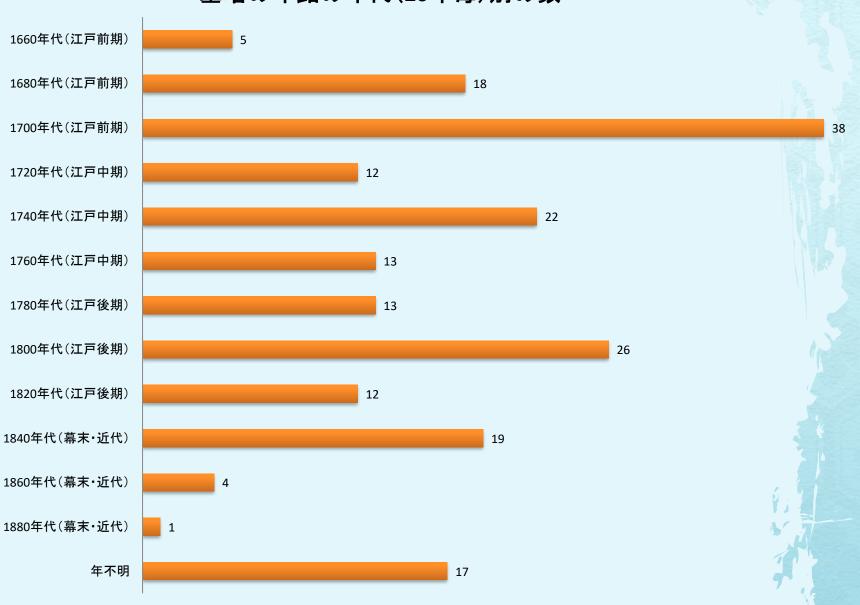
23の梵字(種子)からなる「陀羅尼」(仏の教えの精髄を凝縮しているとされる呪文)が、最下部 6時の位置の文字から 時計回り に円く配置されている。

中央にはア・ビ・ラ・ウン・ケンの大日如来真言を彫る。

光明真言塔(隅丸角柱型 「(蓮華座光明真言) 寳暦五乙亥年/妙蓮信女靈位 /四月九日」

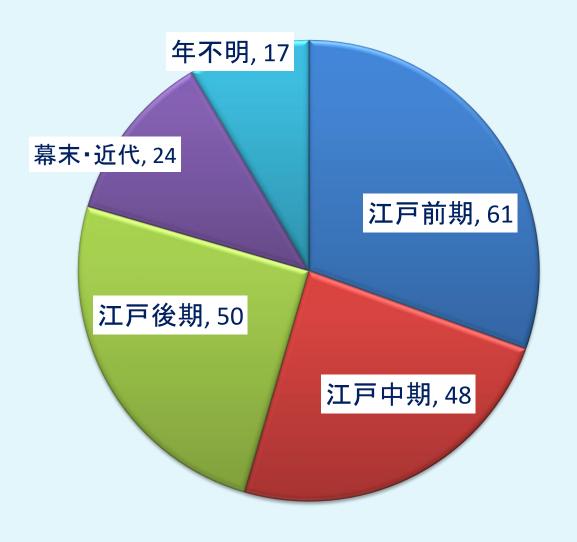
## 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査-8

## 墓塔の年銘の年代(20年毎)別の数

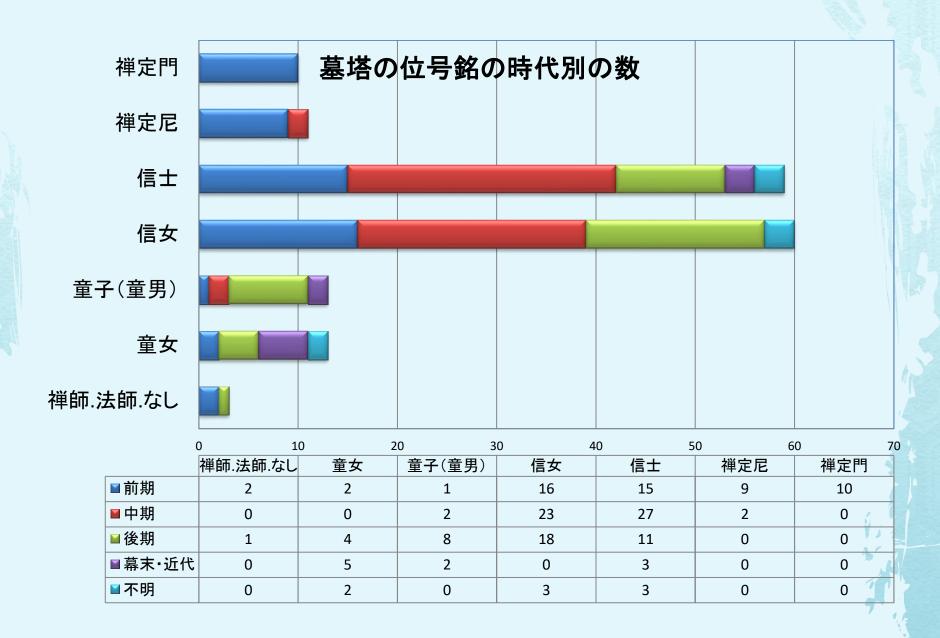


## 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査

# 墓塔の年銘の時代別の数



## 八千代市麦丸のセイマイマエ墓地調査



#### 江戸時代後半~近代、消えた石塔の女性個人名

江戸時代中期後葉からは、建立年と建立に関与した人名は、本体の右・左面に記され、台石に村名と「女人講中〇〇人」「同行〇〇人」などの銘が刻まれる。

人名は、「世話人」二~三名が多く、「〇〇エ門」や「〇兵工」などの家名(いえな)となり、**女性の個人名列記はなくなる**。

十九夜講や子安講など女人講がムラの講として組織的に定着し、供養塔造立の費用や手間も、ムラ単位の事業として確立したからであろう。

後期も、女人講関連の石造物での女性個人の名前が記されないが、まれに、**家名に「内」「母」「妻」を付して表記される事例**が見受けられる。

文化9年(1812)の**印西市押付水神社の普門品供養塔**では、本体と台石に近隣の村を含む117人の人名中、24人の女性が、「伊蔵妻」など「妻」銘や「庄右エ門母」など「母」銘が記されている。

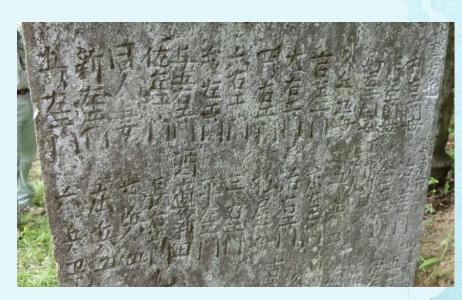
八千代市**萱田町の万延元年(1860)銘の女人講奉納の手洗石**には、53人の人名中35人の女性名があり、それは「青木市良左工門妻・中臺武右工門母」という固有名のない表記であった。

宗門人別帳でも、妻は「誰々女房」とだけ記して名前が省略されている例も多く、女性は結婚すると、夫の付属物として領主から把握され、固有名詞は無視された時代であったと推測されるが、同時にイエ制度が確立していった時代ともいえる。

#### 石造物で探る過去の女人講 江戸時代後半~近代、消えた石塔の女性個人名

文化9年(1812)の印西市押付水神社の普門品供養塔

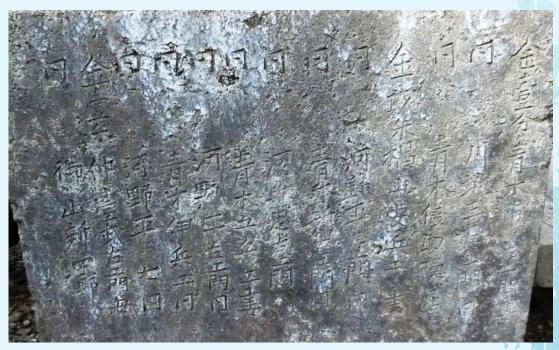






# 石塔にみる近世のムラの女性たち 江戸時代後半~近代、消えた石塔の女性個人名 万延元年(1860)八千代市萱田町長妙寺の「女人講中」寄進の手洗石





長妙寺の「万延元年 願主女人講中」銘の手洗石 女性人名は、「青木良左エ門妻」など30名以上の「〇〇妻」や「中臺武右エ門母」など「〇〇母」銘となっている

#### ムラの女性たちの役割とは 女人講は「女人成仏」への切ない祈りか?

伝えられた「十九夜念仏和讃」からは、不浄ゆえにおとされる「血の池地獄」から逃れ、 「女人成仏」を求める女性たちの悲痛な祈りが伝わってくる。

お産での死亡者はさらに救われ難く、「流れ勧請」のような呪術的な民俗行事も戦前まで行われていたという。

また山岳密教系の霊場の多くは修行を妨げるとして「女人禁制」であり、女性は「罪深き五障三従のあさましき身」(「蓮如上人御文」)と仏教的にも蔑視され、さらに封建制度の中で大家父長制下では家内奴隷のように扱われ、「女大学」などのように儒教的な支配下にあったといわれてきた。

しかし、江戸前期の石造物から見ると、ムラの中での女性たちは一定の役割を持って共同体の一員として活躍し、男女の差もなく遇されていた。

農村・漁村・町場の庶民層の女性たちは、男性に劣らずよく働き、その主婦権は、一部上層の家の婦人とは比べようもなく強固であったという。

中世仏教的な念仏講の中でも、女性たちは主体的であり、ムラ社会の中で女人講の結束は一目置かれ、ムラの大事業であった石塔建立では対等の地位が与えられていた。

文化文政期ごろからは、「女人成仏」のドグマからの解放を求めるように、神道系の祭祀であった子安神信仰を取り入れて「子安講」へと脱皮していく。

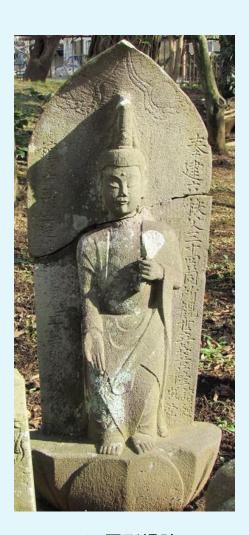
産み盛りのヨメは、イエと地域から子を産み育てることを期待され、さらに、子育てを終わると「卒業記念旅行」として、秩父巡拝の旅を共にし、さらに結束を深めていった。

## 現在の女人講の姿 盛んになる秩父講

#### 佐倉市内の秩父三十四番供養塔-1



寛政5年(1793) 臼井台青年館



江原刑場跡



臼井古峯神社

#### 佐倉市内の秩父三十四番供養塔-2



享和2年(1802) 小竹西福寺



安政6年(1859) 井野の古道入口



文久元年(1861) 小竹三叉路

## 佐倉市内の秩父三十四番供養塔-3



弘化4年(1847) 下志津報恩寺



小竹西福寺



井野千手院

#### 佐倉市宝金剛寺 秩父巡拝塔 天保6年(1835)





#### 左面銘文

三十二輩

上米宮天寒同直 別戸本邊風 弥 所村村村村村村村村村村 村 願 主

利 右 七四二七六五門 人人人人人人妻

## 佐倉市宝金剛寺 秩父巡拝塔 弘化6年(1849)



左面銘文	正面銘文	右面銘文
	塔(梵字キリーク)秩父三十四番供養	弘化五申二月吉日
寒風 格 五 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 日	八 木 嘉村利七惣平金直七重村 左 左 左 左 七 七 門 門 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	雁丸村 源三良 母 源右工門 母

# 八千代市高津の秩父講の絵馬(昭和4年)



高津の秩父三十四番観音霊場参拝記念写真(昭和25年)



## 「女人禁制」の富士への挑戦と「女人講中」銘「小御嶽」石塔

下高野の福蔵院裏山の「仙元宮」石祠と「小御岳 石尊大権現」銘の文久2年(1862)石塔







「女人講中」銘



#### ムラ儀礼の一翼を担った女人講

江戸前期の念仏講では、ムラの女性たちが石塔建立などの一 翼を担っていたことがわかるが、現在に伝わるさまざまなムラの 祭礼行事でも、女性たちの役割があった。

田植えに際しては若い女性たちが「早乙女」として出仕し、各イエの祝い事では子安講の女性たちが「ハナミ」を歌いにいき、「テントウネンブツ」やトムライ、追善行事では念仏講の女性たちが念仏を唱えにいくなどの役割を、つい最近まで果たしていた。

**女性たちは、イエ**制度の確立によってイエに付くものとなったが、 それ以前、**ムラ共同体において、その祭祀を司る重要な役割が あった**と思われる。

古代の伝統をひく有力氏族の神社では、「斎女(いつきめ)」が神に奉仕していたほか、沖縄諸島では「ノロ」や「根神」と呼ばれる神女たちが祭祀を司っていた。女性の持つ霊力が、ムラ共同体を守っていると信じられてきたのであろう。

17世紀半ば、近世の村が成立して、ムラ共同での石塔造立が可能になったころ、**女人講の供養塔も遅れることなく建立されていることは、女性の集団での力がムラ内で評価されていた**からに相違ない。

「女性は原始太陽であった」(平塚らいてう)名残りを、江戸期のムラ社会に見出すのは難しいように思えていたが、女人講の姿を石造物の調査から探ることで、ムラの安泰を祈ってきた女性たちの役割を多少でもつかめたのではないかと感じられてきた次第である。



奄美大島の竜郷町秋名のノロ(女神人) 萩原秀三郎『神がかり』から